

多様な意見を自分の血肉にするために

株式会社 野村総合研究所
コンサルティング事業本部 シニアパートナー
三崎 富査雄

2年以上に及ぶ新型コロナまん延の影響で、感染拡大防止のために致し方なかったとはいえ、人流を抑制する政策が推進され、一部の経済活動の停滞、とりわけ旅行業や飲食業への影響は大きかったといえよう。経済活動だけでなく、多くの社会活動がコロナ以前の状態から変わってしまった。マスクを着けることが常態化することで、口元を見せることができず、幼い子供の発育にも悪い影響を及ぼしているのではないかという話も聞く。人となるべく会わない、会ったとしてもリモートで、という状態が社会に対してどういったインパクトを与えるのかについてはさまざまな研究がなされているが、時間の効率性が高まるといったポジティブな面もあれば、ネガティブな影響も少なくないだろう。

もともと、米国では社会の分断が、とりわけトランプ大統領誕生のころから大きな問題として顕在化し、指摘されてきていた。その一つの要因が、ネットの浸透とそれに伴う SNS の活用だとされる。ネットが浸透した世界では、自分と同じような意見を見聞きし続けることによって、自分の意見が増幅・強化される「エコーチェンバー現象」が起きやすいのである。革新的な意見の持ち主は周りがみんな革新的な意見を持っていると思い込んで、より革新的な意見を支持するようになり、逆に保守的な意見の持ち主はより保守的になっていく、というのはいかにも理解しやすい。では、このエコーチェンバーから外に出て、他の意見を半ば強制的に参照するようになれば多様な意見を踏まえた上での意見形成が実現するかというとそうでもないらしい。

デューク大学の Chris Bail 教授はその著書 *Breaking the Social Media Prism* のなかで、米国の共和党員にリベラル派の情報を 1 カ月間見せ続けるとより保守的な考えを示すようになり、逆に民主党員も保守的な情報を見てよりリベラルな考え方を示すようになったと言う。つまり、反対側の意見に触れたからといって、穏健派になるわけではなく、むしろ既存の意見を強化するようだ。ではどうすればよいか。少人数グループで意見を戦わせたほうが、意見が変わることがある、とスタンフォード大学の Larry Diamond 教授は主張している。

意識的に多様な情報に接触しているようでも、本当に多様な意見を理解するには、単なる情報収集だけでなく、他者との熟議が必要ということだ。独裁者は他者と熟議をするどころか、限られた情報しか入ってこないことで判断を間違えることもあるだろうが、自由民主主義の国に暮らすわれわれは健全な考え方を常にアップデートしていくためにも、コロナ禍で陥りがちなコミュニケーション不全を積極的に乗り越えて他者との対話を進めていきたいものである。